51

藤浪 鑑教授とがんの疫学調査

青木 國雄

〔目的〕藤浪 鑑教授とその指導生は一九〇八年以来、がんの統計的、地理的研究として、地域全体のがん死亡の特性、動向、発癌関連の環境ならびに生活習慣を詳細に観察、分析、公表している。こうした地域住民すべてを調査した研究はわが国では最初と思われる。この研究の意図、方法、分析、成果の概要とその意義について考察することとした。

〔方法〕一九〇八年から一九三五年の間に公表された原著論文、総説、関連記録を用いた。当時の研究主題は統計的、地理的研究であるが、現在の疫学研究のなかに含まれるので、ここでは疫学調査という用語を用いた。

一、藤浪教授の意図

藤浪教授は病理学者であるが、局所病変と共に全身状態との関係も重視され、発生機序も生物学的要因と共にその地域のいわゆる風土要因、生活条件、住民の生活習慣などとの関連に強い関心を示された。「疾病は常に人間身体に結託しており、地理と人類生活は須ゆも離断され得ない。この地理と疾病との間に存する親密関係は、我が学術の上にも、又実際生活の上にも甚だ重要な意義を有する」として、がんでは取り、土壌成分、地質、乾燥――低湿地、緯度の差、空気、水、生活状態との関連を論じ、また疾病頻度は時と共に消長するが、それは天災、戦争などの人災、人口の変動などと関連している。従って「これ（この研究）は将来大いに興起するものの一つでなかろうか」といっておられる（一九三三、日本学術協会報告）。

二、がんの統計的、地理的研究

がんについては一九〇八年、教室の半井 朴と共同で山城、近江国の一部地域のがん死亡の町村別分布とその生物学的、及び生活習慣要因について簡略な発表をした。ついで、門下の鈴木信義研究生に山城、近江国全体の町村別、がん部位別死亡率の特性、動向、さらに地域の地理学的特性、人口構成、産業、生活水準、収入、職

業、婚姻、生活習慣、飲酒、食生活、嗜好、がん家族集積などを町村別に現地調査をさせて検討、公表させた。さらに香川県、奈良県に同様調査を拡げられた。同様な調査は愛知医大に赴任した川村の推進で、愛知県、岐阜県、静岡県、山梨県、さらに三重県、富山県、石川県、福井県で、全県下と町村別に実施された。いずれの調査も鈴木の調査方法を基準として行われたが、特殊な要因を疑われる地区は若干ことなる。

三、死亡調査

各県に届けられた死亡診断書を用い、死因ががんの場合は部位別に分類し、性、年齢、住所とその地理的要因、職業との関連を検討した。

四、社会医学的調査

産業、職業、住居、食生活など生活習慣を調査した。山梨県では日本住血吸虫との関係についての項目が含まれた。現在良く行われている症例対照研究はしていない。注目すべき統計的知見、発生関連要因について総括する。

五、考察

上記の原著論文のうち、一部は入手できなかった。死亡統計の診断根拠の均質性は当問題がないわけではないが、相互比較性はある。死亡率は年齢訂正されていない。発生要因については近年問題となった多くの要因が検出され、論議されており、貴重な歴史的資料である。がん予防を意識して取り組んだ態度に敬意を表する。

六、まとめ

一九三〇年代はじめまで続いた研究も藤浪教授の逝去（一九三四）もあり、中断したようである。当時として世界の先端の研究と考えている。

（愛知県がんセンター）